

ミルズの社会学と疎外論 : 疎外論と社会学 (3)

SAMIZO, Makoto / 三溝, 信

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Society and labour / 社会労働研究

(巻 / Volume)

16

(号 / Number)

2

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

30

(発行年 / Year)

1970-01-15

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00006293>

ミルズの社会学と疎外論

——疎外論と社会学(3)——

三 溝 信

1

ミルズ (C. Wright Mills 1916~62) も、フロムと同様、日本でよく知られた社会学者である。彼の著書はすでに八冊が翻訳されており、近く出版が予告されているものを入れると、ごく初期の実証的研究を除くすべての著作が翻訳出版されることになる。そのうちでも、『ホワイト・カラー』と『パワー・エリート』は、現代社会学の入門書として広く読まれ、版を重ねている。

ところで、これまたフロムと共通するのであるが、ミルズは、その思想的影響力は全体として非常に大きなものではないながら、しかもアメリカの社会学界では主流を占める学者ではなかった。テキサス生れの生粋のアメリカ人である彼は、にもかかわらず、アメリカ社会学界で常に異端的存在でありつづけた。その原因がある程度まで彼のパーソナリティに由来するであろうことは、例えば『社会学的想像力』の中で彼がアメリカ社会学界の大御所であるパーソン

ンズに対して行なっている批判を見れば、首肯しうるところであろう。そこには、必要以上に強く示された敵愾心が、そして相手をやつつける楽しみだけが、あふれているからである。しかし、それが故に日本の読者をひきつけている異端性は、いうまでもなく、もっと内容的な、彼の社会的姿勢全体とかかわったものである。

『人間のイメージ』という標題のもとにミルズが社会学の古典からの抜萃を編集した書物があるが、そのイントロダクションには、彼のそのような姿勢が要約的に示されている。すなわち、彼は、そこでアメリカの現代社会学を批判しつつ、それと対比して、すぐれた社会学者たちが常に歴史・社会・人間という三つの契機を相互に関連させながら、しかもそれらを全体として統一的にとらえて来たことを示そうとしているのである。⁽¹⁾ 彼が自分の社会学的労作において実現しようとして意図したのも、現代社会についてのこのような歴史的・総合的な把握であったといえよう。そして、この故にこそ、彼はアメリカ社会学の一般的潮流に対しては異端たらざるをえなかったのである。つまり、彼は、社会学者を含む多くのアメリカ人が不動のものとして前提し安住していたアメリカ社会の歴史性を、したがってそれが批判され変革されうるものであることを、明らかにしつつけたのである。彼の思想的影響力は、アメリカ社会でも、まさにこの異端性によるものであった。その意味では、おそろくあと数年長生きしていたなら、彼はもっと多くの同調者を見出しえたものではなかったろうか。一九六〇年代を通じて、「世界の憲兵」としてのアメリカの正当性は多くのアメリカ人からも疑惑の眼で見られるようになったからである。しかし、彼の生きた時代はそうではなかった。その中でアメリカ的生活様式やその価値感を批判しつつけることは、勇気のいることであり、自らを異端視しなければなしえないことであった。彼が（後に見るように客観的にはそうではないのに）あえて自分を「卒直なマルクス主義者」と呼ぶのも、⁽²⁾ このような強い批判精神に基づいてのことであらう。

この姿勢は、そのまま実践的関心とも結びつく。ミルズは決して実践家ではなかったが、実践的な姿勢は常にもっていた。彼は、さしせまった政治的課題に理論的に正面から立ち向うことによって、インテリゲンチヤとしての自己の政治的責任と義務を果そうとした。核戦争の危機が現実のものとなった時代に、彼は『第三次世界大戦の原因』を書き、東西の知識人が果すべき役割の重要性を強調した。キューバ革命が成功するやただちにキューバにわたって、『キューバの声』を出版し、キューバへの不干渉をアメリカ人に呼びかけた。多くの社会学者がそれらの「大」問題にまったく無関心であったり、あるいは行政機関と関係することをもって実践的と考えているときに、それをしたのである。

このように、ミルズの異端性は、現代のアメリカ社会を根底から批判的に把握しようとしつづけたことにある。彼が日本で多くの読者をもつのは、彼のこの姿勢が日本の読者に肯定され歓迎されているからにほかならない。ミルズの直面したアメリカ社会の病弊の多くは、今やわれわれ日本社会の病弊ともなりつつあるのである。

ところで、ミルズがこのように批判的にとらえた現代アメリカ社会、それは高度に発達した独占段階の社会であった。この社会が人間におよぼす影響を、フロムは疎外の概念を用いて語っていた。同じ社会のほぼ同じ問題を対象とする以上、ミルズの分析も疎外状況と深くかわらざるをえない。次に示すように、彼もまた分析の焦点に歴史的人間を置くのであるから、とりわけそうである。

「現代の諸問題——そこではいまや人間の性質そのものが問題となっている——は、歴史が社会研究の軸であるという見方を一貫して採用し、また社会学的に基礎づけられ歴史的にも適切な人間の心理学を、一層発展させることが必要であるという認識なしには、正しく設定することはできない。歴史を利用せず、また心理学的事実を歴史的に感光させないならば、社会学者がかれの研究にとって準拠点となるべき諸問題を、正しく提起することはできないであらう。」⁽³⁾

したがって、彼の社会学は、そこで疎外という用語が用いられている場合はもちろんのこと、用いられていない場合ですら、多くは疎外論を含んでいるのである。その意味では、本論でも、彼の疎外の概念を検討するとともに、その用語を用いないで語られる彼の中心概念をも分析し検討することが必要となるであろう。

(1) C. W. Mills, "Images of man, The Classic Tradition in Sociological Thinking" (New York: George Braziller, Inc. 1960). "Introduction"

(2) ミルズ、陸井訳『マルクス主義者たち』(青木書店、一九六四年)、第五章。

(3) ミルズ、鈴木訳『社会学的理想像力』(紀伊国屋書店、一九六五年)、一八八ページ。

2

まず、ミルズ自身の疎外の概念を検討することからはじめよう。

とはいえ、この検討はそれほど容易ではない。例えば、どちらかといえば初期に属する『ホワイト・カラー』を見よう。そこでは疎外という用語がふんだんに目につく。ホワイト・カラーは、仕事において、生活において、政治において、パースナリティにおいて、疎外されている、あるいは自己疎外におちいつている、と書かれている。そこでは、疎外という用語は、ホワイト・カラーの心理ないしは活動を明らかにする上での鍵概念の位置を占めているように見える。それはまた、現在一般に用いられているようにかなり広い意味で、すなわち人格とかかわるような意味で、用いられている。ところが、この二年後に出版された『性格と社会構造』(ガースと共著)においては、疎外という用語は三回ぐらいしか出てこない。また五年後に出版された『パワー・エリート』では、わずか一カ所で使われているにすぎない。前者は共著であり原理論であるという条件を考慮しうるとしても、後者は『ホワイト・カラー』と同じ

現代社会を問題としているのであり、そこで主に論じられる大衆の大きな構成部分をホワイト・カラーが占めているにもかかわらずである。これらの書物では疎外という用語はただたんに「切り離されること」を意味しているにすぎず、alienation という原語をその日常的な意味に、つまり「離間」「譲渡」等と訳しても何らさしつかえないほどである。それに対して、さらに後の『社会学的想像力』では、全体の中での割合は非常に小さなものであるが、『第九章、理性と自由について』の中のひとつの節が疎外を論じるためにさかれているのである。

このように見て来ると、ミルズにとって、疎外の概念は必ずしも全生涯を通じて同一の意味をもってはいなかったことが明らかになる。フロムの場合には、疎外はしだいにその重要さを増し、最終的には（そして現在も）現代社会をとく鍵概念と考えられるようになった。ミルズの場合には、逆に、むしろ出発点でそれをあらゆる領域にかかわる鍵概念としながら、後になるほど、疎外ということばを用いなくても説明できることがらは、そのことばを用いなくて論じようという姿勢が示されているといえるのである。

したがって、ミルズの疎外概念を検討するとき、われわれはまず、それが全期間を通じて同一ではないこと、また必ずしも彼にとつて中心概念ではないことを、前提として認めておかねばならない。その上で、ここでは、やや抽象的・原理的なレベルで、彼が疎外をどう理解し、どのように現代とかわらせていたかを検討することにしよう。このような見地から主として利用できるテキストは、『マルクス主義者たち』と『社会学的想像力』である。

『マルクス主義者たち』において、ミルズは、『思想の一覧表』（第四章）の名のもとにマルクス（とエンゲルス）の思想を彼なりにいくつかのテーゼに分解して示している。そのテーゼのひとつに「労働者の物質的貧困も、その疎外も激化するであろう」というテーゼがあり、ミルズがマルクスの疎外概念を論じるのは主としてこの部分においてで

ある。このテーゼを見れば明らかなように、疎外は、物質的貧困とは別のものとして、それと対をなす概念として、とらえられている。次の説明を見ればそれはもつとはつきりしよう。

「労働者の増大する貧困とは、単にその生活状態の物質的貧困ばかりでなく、その疎外から生じる心理的喪失感をも意味する。この二つのものを区別しておくことが必要である。マルクスにとっては、後者の疎外の方がいっそう重要であったようにみうけられる。たとえ物質的な生活水準が改善されたにしても、疎外の方は存続し深まってゆくこともありうる。ちかごろのマルクス主義者たちは、心理的喪失感、つまり労働における人間の疎外の方を強調するが、マルクス自身は、労働者の苦痛がこの両方の面で増大することを予測した。」

このように、疎外を物質的貧困とは別の精神的問題ととらえるのは、ミルズに一貫した態度である。これを、疎外の概念を少しでも明確にしようとするところみと善意に解することもできないわけではない。しかし、ミルズ自身の疎外論の独自の展開の場ではなく、マルクス解釈の場でこのような区別を主張している事實は、やはりむしろ、『経済学・哲学草稿』から『資本論』に至るマルクスの論理の歩みを、彼が十分に理解できなかったことを示していると考えるべきであらう。それは、いいかえれば、『経済学・哲学草稿』で展開されている疎外の深い弁証法的な意味を理解できなかったということでもある。事実、『経済学・哲学草稿』に關してミルズが興味をもつのは、「生産活動そのものからの疎外」についてであり、「生産物からの疎外」や「類からの疎外」は終始無視されたままなのである。このような疎外の理解は、疎外の原因を資本の支配以外のところに求める論理を生み出す。あるいは逆に、その論理があるからこそ、このようなマルクス解釈が出てくるという方が正確かもしれない。この点についてはいずれくわしく検討するが、この理解からの当然の帰結として、ミルズにおいてもまた、疎外は特殊に二十世紀的状况にかかわる病弊とされるのである。

『マルクス主義者たち』では、この後の章で、現代の（というのはミルズの）立場からのマルクスのテーゼの検討がつづく。そこでミルズの疎外論がさらに展開される。すなわち、彼は、右の区別を受けた上で、福祉国家の形成と発展、労働者の闘争の成果、永久的戦時経済、資本主義の力量等の理由で、労働者の物質的生活水準は向上しており、この点ではマルクスの見と少しは当らなかったとする。いまやまさに、疎外こそが中心的課題となる。

「マルクス主義者の場合も、非マルクス主義者の場合も、批判の強調点は、物質的貧困から心理的収奪、あるいは疎外に移される……。『搾取』の新しいしくみが補足されなければならない。たとえば、ふえた余暇時間は娯楽施設によって支配され、収奪されさえしている。真に経験し、理性的に判断する機会が、そしてそのうちに、理性的に判断する能力自体が、しばしば収奪されるのだ」⁽²⁾

この状況は、マルクスをこえてたものであり、研究の新らしい課題を提起している。

「この種の観念を、われわれが現在知っているような細部にいたるまで、マルクスに立ち帰って見つけたそうとするのは行きすぎである。それは、そこには存在しない。マルクスは、心理的搾取のさまざまな手口を知っていたが、われわれが知っている多くのことを知らなかった。近代の疎外のしくみ、範圍、所在、および影響は、かならずしもマルクスの著作のどれとも矛盾するものではないが、かれはこれらのものを記述しなかった。そればかりでなく、われわれは、これらの心理的搾取が資本主義の本性に根ざすものではなく、資本主義だけのものでもないのではあるまいかと考えている。それらは非資本主義社会にも、資本主義を克服した社会にも現れている。それらは、かならずしも生涯手段の私的所有にも、あるいは国有にも根ざすものではなく、大規模な工業化自体に根ざすものと思われる」⁽³⁾

「さて疎外論は、物質的貧困化論とくらべれば、はるかに説得的ではあるが、疎外のさまざまな形態や原因には、これについてのマルクスの、謎のような、あまり明確でない注釈をこえるものがある。そればかりではない。疎外はかならずしも、——あるいは、つねにとさえ言えるかも知れない——革命的衝動をもたらしものではない。反対に、それは、左翼的あるいは右翼的な反乱よりも、政治的無関心をともなう場合が多いように見える」⁽⁴⁾

『マルクス主義者たち』の二年前に書かれた『社会学的想像力』においても、強調されるのは、疎外が「現代における人間の条件という主題であり、またその名に値するすべての研究の主題である」ということである。⁽⁵⁾ただ、主としてインテリゲンチヤを問題とするこの書物では、疎外の内容や原因がもう少し違った形で論じられている。すなわち、彼によれば、現代社会は十九世紀的な価値感が崩壊し、しかもなお新しい価値感が形成されていない時代である。十九世紀における理性と自由という価値が合理的に考え自律的に行動する個人を前提していたのに対し、現代社会では合理性は組織にのみ体现され、個人はこの巨大な組織に適応することのみを要求されている。全体を見とくしえない個人は、そのことによって不安におちいるのだが、そこに新しい価値が形成されてこないのです、不安なままに、自己をとりまく日常性の中にますます閉じこめられて行く以外、道を見出しえないのである。そこでは政治的無関心が一般的となる。

「現代は不安と無関心の時代である——それはいまだ理性のはたらしや感受性の役割を受けいれることが許されるような形では定式化されていない。そこにしばしば存在するのは私的问题——価値と脅威という枠組の中で規定される——ではなくて、漠然たる不安の苦痛である。しばしばそこには明確な公的问题ではなく、すべてがただなんとなく不当であるという敗北感が存在するにすぎない。脅かされている価値も、それを脅かすなものも摘出されることはなく、要するにそれは決定的な点にまで明示されるにいたっていない。」⁽⁶⁾

「ますます高まっていく合理化の傾向がこのような結果を生み出すとき、個人は「かれのなしうる最善をつくす。」かれは自分が埋没して抜ける道のない状況に、かれの要求と労働をかみ合わせる。やがてかれは脱出口を探そうとしなくなり、そして適応する。労働のそとに残されている生活部分のなかで、かれは遊び、消費し、「面白いことをする。」ところがこの消費の領域もまた合理化されている。生産からも労働からも疎外されているかれは、消費からも真の余暇からも疎外されている。個人のような適応と、それが私的生活状況や自我に与える影響は、たんに理性に到達する機会と能力と意志を喪失させるだけではなく

い。それはまた自由な人間として行動する機会と能力にも影響を与える。まことに、自由の価値も理性の価値も、かれには無縁であるかのようにみえる。⁽⁷⁾

このように、疎外は、ここでは、理性・自由・自律・自我等に対立するものとして、要するに「西欧における自由な人間像の反対物」として、描かれている。その原因は組織に、もっぱら合理性のみを追求する組織に、そのような組織の「理性なき合理性」にこそある。

「合理的に組織された社会の装置は——個人にとっても社会にとっても——必ずしも自由を拡大する手段ではない。むしろそれはしばしば、専制と操縦の手段、理性に到達する機会そのもの、自由人として行動する能力そのものを収奪する手段にほかならないのである。」⁽⁸⁾

このような疎外概念は、実存主義の立場から現代社会の疎外を問題とする人々の概念とほぼ一致するものである。そこには、伝統的な個人主義が、そして十九世紀社会を理想とする一種の反動的ロマンティズムが、顔をのぞかせている。この点についても、われわれは後に問題とすることになる。

以上、かなり抽象的なレベルでのミルズの疎外論を見て来た。しかし、いうまでもないことだが、社会学者としてのミルズのすぐれた資質は、このような抽象的論議ではなく、むしろ実証的・具体的な研究においてこそ示されている。そこでは、疎外ということばが使用されるかどうかにかかわらず、疎外はもっと具体的な内容をもって描かれるし、原因ももう少しは具体的に示される。そこで、以下、彼のそのような書物として代表的な『ホワイト・カラー』と『パワー・エリート』において、疎外がどう把握されているかを見ることにしよう。

(1) 『マルクス主義者たち』、上、八五ページ。

(2) 同書、上、一一三ページ。

- (3) 同書、上、一一三ページ。
- (4) 同書、上、一一四ページ。
- (5) 『社会学的想像力』、二二五ページ。
- (6) 同書、一五ページ。
- (7) 同書、二二三―四ページ。
- (8) 同書、二二二ページ。

3

『ホワイト・カラー』の第一部は、旧中産階級が没落して、新中産階級にホワイト・カラーがアメリカの人口のしだいに大きな部分を占めて来る歴史的過程の叙述に当てられている。やや冗長なこの叙述を通じてミルズが述べようとしているのは、今やアメリカを代表するのはホワイト・カラーであり、「ホワイト・カラーをさいなんでいる苦惱は、実は二十世紀に生きるすべての人間にとっての苦惱なのである」ということである。⁽¹⁾この苦惱とは疎外にほかならない。第二部以下で、ミルズは、ホワイト・カラーの活動のさまざまな領域に入りこんでこの苦惱の実態を明らかにしようとする。ここでは、疎外という用語もふんだんに使用されている。

彼がまず問題とするのは、ホワイト・カラーの労働(仕事)の領域における苦惱であり疎外である。もっとも、組織との関連で述べられるこの領域での疎外の実態は、われわれにとってはずでに目新しいものではない。要するに、ホワイト・カラーの職場ではすでに組織のピラミッドが完成されていること、この組織の一点に組み込まれたホワイト・カラーにとっては、自発的な判断にもとづく自由な行動の領域はほとんど残されていないこと、ここで主体的な

のは組織であり個人はその一齒車にすぎないこと、等々である。彼はホワイト・カラーの各階層についてこのような事実を描きだす。例えば、ピラミッドの頂点に位置する経営者について、彼は次のように書いている。

「かれらは次から次へと問題を手がけて、それぞれに決定を下してゆく。しかし実は決定を下すべき確たる根拠はどこにもないのであり、ただ命令を下す人間機械になっているにすぎず、部下が自分たち経営層を疑うなどということは夢にもあつてはならぬと思つてゐるだけのことである。」

このように「人間機械」にされてしまうこと、より下層のホワイト・カラーに關していえば、「事務機械」・「販売機械」等の役割しか与えられないこと、これが労働の領域におけるホワイト・カラーの苦惱であり疎外なのである。

このような疎外の実態描写の後、彼は、それがホワイト・カラーのパスナリテイにおよぼす影響を問題として、「パスナリテイ市場」という概念を提起する。これは疎外との関連では注目すべき概念である。例えば百貨店の店員の場合を考えてみよう。彼女は「販売機械」であることを期待されているのであるが、そのためには完全な自制が必要である。「まじめ」であつたり「品位」をもつていたりすることは、多くの場合、うまく客をつかまえることに失敗する原因となるのである。自制とは自己の感情をおし殺して「仮面のパスナリテイ」を身につけることにすぎない。ところが、この「仮面のパスナリテイ」がいつとはなしに彼女の第二の本性となつてしまうのである。

「現代の大都市生活者においては、他人に対する不信と自己疎外とが一般的特徴として認められるが、その根底には、大規模化した販売機構の最もいちぢるしい影響である、パスナリテイの市場という事実が原因としてかくされているのである。……人々は他人を操縦するために、その人をいかにも重視しているかのようなふりをする販売員流の倫理や習慣を身につける必要に迫られてくる。……この倫理は人々の生活様式を根底から規定するものとなり、今では目ばたき一つにもこの倫理が結びついてゐる。……というのは、どんな人間関係にも相手を操縦するという面がふくまれていることを誰でも知つてゐるからである。互いに相手を自分の目的達成のための手段にしてやろうと秘かに画策するから、人々は互いに心を打ち明け合うことがなくなつて、

相互に孤立するに至る。そしてやがてそれが極端になつて、人間生活のあらゆる面にまで浸透してゆくと、人間はついに、自身までをも手段化し、最後には自己疎外の現象を起す³⁾。」

「パースナリティ市場」の形成は、ホワイト・カラーの疎外のひとつの頂点を示している。それは、親切とか友情等、人格とかかわるいっさいのものが、現代ではもはや商品としてしか存在しえないことの表現である。それはまた、労務管理が、人間の動作の管理ではなく人間の心理の管理となつた時代を示している。今や人間自体が管理および操作の対象となるのである。

「パースナリティ市場」という概念のうちには、同時に、疎外の原因についてのミルズの把握が、かなり具体的に示されている。それが成立するのは、労働力ではなくパースナリティが商品として売買される社会においてである。それは、「主要な労働形態がかつての手工業的な熟練労働から人扱いの方法や販売や他人に対するサービスに変化⁴⁾した社会である。ミルズは現代をそのような社会と考へているのであるが、この原因として彼があげるのは産業主義化の進展という事実である。それ故、疎外は直接に資本の支配に結びつけられるのではない。その原因は特殊二十世紀的な状況にこそあるのである。

「パースナリティ市場」の成立は、疎外がすでに労働の領域をこえてホワイト・カラーの全人格をおおうものとなつたことを示している。この後でミルズが追求するのは、ホワイト・カラーが生活（ないしは消費）の領域でどのように疎外されているかという実態である。もっとも、この描写もわれわれが先に一般論として示したものの具体化の域を出てはいない。ミルズは、仕事そのものに喜びを見出せないホワイト・カラーが、仕事で得た金で、仕事以外の場で、満足を得ようとしてむなしく街頭をさまよう姿を描く。大都會では、コミュニティはすでに崩壊し、家族も心

理的な生活の中心としての機能を喪失しつつあるので、ホワイト・カラーにとって慰安はただ街頭にしか求められなくなっているからである。そこでの彼らにとっての慰安とは、スポーツやマス・メディアから流れでる偶像、恋愛や性的刺激等々である。ホワイト・カラーは、このようなマス・レジャーへの接触を通じて、職場で分裂させられていたパースナリティに統一を回復しようとする。しかし、それは昼間とはまったく異った人間になることによってしか可能ではない。つまり、昼間と夜間とのパースナリティは、いぜんとして分裂させられたままなのである。しかも、これらのマス・レジャーは、資本によって大量に準備され、おしつけられてくるものである。そこに慰安を見出そうとすることによって、ホワイト・カラーの夜のパースナリティからもまた、自発性や創造性はうばわれて行くのである。

「内容の空虚な人間の娯楽は、やはりそれにふさわしく空虚であり、結局人間の心の奥の空虚をみたしきれない。……近代人にとつての余暇は、かれらのエネルギーをすり減らす絶えない労働の苦痛から逃れて、スリルと魅力を受動的に味わう時間であるが、べつの意味では、ほかの種類の刺激によって相変らずエネルギーをすり減らされる時間であるにすぎない。」⁽⁵⁾

こうして、消費生活の場でも、いぜんとしてホワイト・カラーは孤立しており、不安にさいなまれている。つまり、疎外されているのである。

ミルズはさらに、このような疎外が政治の領域にどのような影響をおよぼすかを追求する。そこで明らかにされるのは、ホワイト・カラーの政治的無関心である。これはまさに大衆社会における大衆の性格でもあるので、われわれはそれを『パワー・エリート』の中で検討することにしよう。

要するに、『ホワイト・カラー』における疎外の描写は、二十年近く前にそれが書かれたということ——それはやはり偉大なことなのだが——を別にすれば、現在では特に新らしいものを含んではない。注目すべき概念は、『パ

「スナリテイ市場」という概念ぐらいのものである。ただ、この概念を軸としながら、ミルズが、一貫して、疎外がパースナリテイに与える影響（というよりは、ミルズの場合、パースナリテイに影響するところではじめて疎外という概念が成立するのだが）を、問題としていくこと——この点は、これ以後の彼の疎外論の進展（それをわれわれはすでに前節で検討した）との関連で、特に目をひくところであるといえよう。

- (1) ミルズ、杉訳『ホワイ・カラー』（創元社、一九五七年）、序文九ページ。
- (2) 同書、七〇ページ。
- (3) 同書、一七一―一二ページ。
- (4) 同書、一六五ページ。
- (5) 同書、二二―二一ページ。

4

『パワー・エリート』では、すでに述べたように、疎外という用語はわずか一カ所で用いられているにすぎない。『ホワイ・カラー』が状況描写の書であるのに対し、『パワー・エリート』は、何らかの意味で、そのような状況からミルズなりのひとつの「構造」を作りあげようと意図して書かれている。その「構造」がいわゆる大衆社会である。したがって、『パワー・エリート』のかなりの部分は、このような「構造」を描きだすのに当てられている。この「構造」概念については、われわれもすぐ次の節で問題とすることになろう。しかし、いずれにしろ、ミルズは人間に対する興味をいだきつつけており、そのような「構造」が規定してくる性格に無関心なのではない。『パワー・エリート』の各所で大衆社会における人間の性格が述べられており、それらは、疎外という用語は用いられていない。

にしても、現代社会における疎外の深化を示すものである。

ミルズは、この書の前半を、現代アメリカの各エリート層の実証的研究に当てる。この長いやや退屈な描写を通じて、しだいに現代アメリカの権力「構造」が明らかとなるしくみになっている。すなわち、ここでは、伝統的な中産階級、地方の名士たち、いわゆる中間的な指導者たちはすでに力をうしなっている。現代のアメリカにおいて、決定を下す（ないしは下さない）権限はごく限られた人々、つまり、財界、軍および「政治幹部会」（政府の上層部）という「ビッグ・スリー」に集中されているのである。これがパワー・エリートを構成している。これに対抗する力はどこにも存在しない。中間には彼らのおこぼれにあずかろうとひしめいている中位の指導者と圧力団体があり、底辺には分散し孤立ししてもつばら操作されるだけの大衆があるにすぎないのである。

これがミルズの描くアメリカの大衆社会なのであるが、われわれにとって興味があるのは、その中で人間はどう変わったのかという問題である。この問題に関しては、ミルズは、エリートと大衆という立場の異った人間がそれぞれに違った形で疎外状況におちいつている姿を描いている。

まずエリート層について。

ミルズは、現代アメリカのエリート層に見られる頹廢を「上層部の不道徳性」ということばで激しく非難する。この不道徳性の根源は金の力にある。すなわち、彼によれば、十九世紀的な価値規準のほとんどすべてが崩壊してしまった中で、「金と金で買えるもの……を高く評価する価値」だけは生き残り、ますます強いものとなった。「金は、成功を測る唯一の明瞭な基準となり、金という点における成功は、現在なお、アメリカにおける最高の価値である」⁽¹⁾。金によって不道徳性をおおいかくすことが可能なため、不道徳な手段でも金を得ようとするのが一般的な風潮と

なる。その際、それを最も大規模に行ないうるのがパワー・エリート層なのである。

「商売、戦争製造、政治的かけ引き、などの渦巻く会社世界の中では、個人の良心は薄弱となり、上層部の不道徳性が制度化される。上層部の不道徳性は、たんに会社・軍隊・国家における管理様式の腐敗ではない。それは、資本家階層として、軍事国家の政治と深く絡りあっている会社富豪の本質的特徴である。」

このような腐敗の中にどっぷりひたって、エリート層はしだいに歪められたパスナリティを身につけることになる。彼らが相互に「地位を借用」し合い、特殊なグループを形成して行く現状では、とりわけそうである。彼らは実務家であり、彼らに必要なのは「他人から重要人物と認められること」と「判断力」にすぎない。本来の意味での理性的いしインテリジェンスは彼らからはうしなわれるのである。

エリート層のこのような不道徳性の描写に際して、ミルズは疎外という用語を一度も用いてはいない。しかし、金の力によって人間がこのような墮落させられること、それはまさに疎外ではないのか。マルクスは、『経済学・哲学草稿』の『貨幣』の章において、すでにこの疎外をみごとに描いていた。そこでは、それは資本主義に本質的なものとしてとらえられていた。疎外という用語を使用するかどうかは別として、ミルズの描写は、このような不道徳性の原因を、資本主義の本質と考えるのか、特殊に大衆社会化状況と関連させてとらえるのかという点で、不明確さを残している。この不明確さは彼の方法全体とかかわるものであるが、そのことについては後に問題としよう。

ミルズは、さらに、上層部のこの不道徳性が、それに続く層、すなわちホワイト・カラーの上層部のパスナリティにただちに影響する事実を指摘する。というのは、彼らを選別する権力をもっているのが、これら不道徳なエリートたちだからである。

「会社幹部たちが、どんなタイプの人間が必要とされているかについて話したり書いたりしているところを読むと、次のような簡単な結論を引き出さざるをえない。すなわち、要するに、すでに最高の地位を占めている人々に「適合」しなければならぬということである。すなわち、自己の上役や同輩たちの期待に応え、個人的振舞や政治的見解においても、社交にさいしても、また、業務上のやり方においても、すでに高い地位を手に入れた人々、その判断に自己の成功が左右されている人々に、似なければならぬのである。」

「個人は自らを形成するのではない。……人々は、その基準に適合しようとして自らを形成する。……独力によって叩き上げた人間などなく、あるのは自らをその基準に合わせた人間である。」

ここには、ホワイト・カラー上層部の疎外が二重化された形で示されている。「パースナリティ市場」を通じて自己をすでに形成された組織に適應させて行くこと自体が疎外であるのに、しかもそうすることによって、現代の腐敗と不道徳性を自ら進んで自己の第二の「パースナリティ」として選びとらねばならないのが、彼らのおかれた状況なのである。このように、エリート層の不道徳性は、彼らが支配階級であるが故に、彼らからにじみでて、しだいに社会の全成員に共通する性格となるのである。

それでは、そのような状況の中で、大衆に固有の疎外はどのようなものと考えられているのだろうか。

大衆という概念は、ミルズの場合、周知のように公衆という概念と対比されて導きだされたものである。このような概念形成の方法そのものが批判さるべき多くの問題点を含んでいるのであるが、それは次節にゆずって、ここでも直ちに大衆の性格を問題にしよう。ミルズは、大衆出現の条件として、コミュニケーションの崩壊、アソシエーションの巨大化とその機能の変化、コミュニケーション・メディアの発達、義務教育等をあげるが、中でも彼が重視するのは後の二つである。すなわち、第一に、現代におけるマス・コミュニケーションのメディアの発達は、人々を一種の「心

理的文旨」にしてしまう。というのは、それは個々人の経験にステレオタイプ化した意味づけを行なうことによって、また小規模な討論を破壊することによって、個人の私的生活とその人間的意味とを破壊してしまうからであり、そしてまたステレオタイプ化した新しいリファレンス・グループを個人に与えることによって、個人の自我の内部にまで入りこみ、新しい自我の願望を生み出すからである。つまり、ひとことではいえば、それは経験の意味づけから理想の設定にいたるいっさいの個人の心理過程を、操作する力をもつからである。第二に、義務教育もまた、教養を身につけさせるのではなく、技術と適応を教えるにすぎない。『民主的学校』とは、知的凡庸と、職業訓練、国家主義的忠誠心の養成以外にはほとんどなにも意味しないばかりが多い。⁽⁶⁾ いずれにしろ、これらの条件が相まって、権力の集中の対極に分散化された大衆が出現するのであるが、大衆の性格は大衆出現のこのような条件と不可分に結びついたものとしてとらえられている。

大衆は孤立し、不安にさいなまれているという。それは、彼らが、右に述べたような条件のために、自己の経験をより大きな社会的文脈につなぐことができないからである。彼らは、個人的な悩みが実は他人とも共通のものであることを知らない。それ故、個人的悩みは個人的に解決せざるをえず、そこから不可避免的に小状況埋没が生じるのである。ミルズはそれを次のように描く。

「かれらは、日々繰り返される生活の中に埋没し、討論によって、ましてや行動によって、多かれすくなかれ狭小なその生活を踏み越えない。⁽⁶⁾」

「かれは、自分の独立性を失っている。もっと重要なことは、独立性を保とうという願望をも失っている。じつさい、自己の精神と自律的な生活様式とを持った独立の個人というようなイメージさえ持っていない。⁽⁷⁾」

「大衆社会における生活は、不安を植えつけ、無気力を促進する。それは人々を落着かなくなり、漠然とした不安に陥れる。それ

は、個人を、強固な集団から切り離し、確固たる集団規範を破壊する。大衆の中の人間は、目標を持たずに行動し、無意味感に襲われる。」⁽⁸⁾

このように、大衆に関してミルズが特に強く批判するのは、彼らの小状況埋没の実態である。ここでも、疎外という用語は使われていないが、この状況は、先に一般論として示した彼の疎外の概念の具体化なのである。

- (1) ミルズ、鶴飼・綿貫訳『パワー・エリート』（東京大学出版会、一九五八年）、下、五七〇ページ。
- (2) 同書、下、五六六ページ。
- (3) 同書、上、二二三ページ。
- (4) 同書、下、五七五ページ。
- (5) 同書、下、五三〇ページ。
- (6) 同書、下、五三一ページ。
- (7) 同書、下、五三五ページ。
- (8) 同書、下、五三五ページ。

5

われわれは、いくつかの側面からミルズの疎外描写の後を追ってきた。それらは、それぞれに現代社会の一状況をとらえており、その限りにおいて若干の示唆に富む内容を含んでいたといえよう。ところで、最初に述べたように、彼は、歴史・社会・人間の三契機を統一的に把握することを求めていた。「社会学的に基礎づけられた歴史的にも適切な人間の心理学」を、あるいは同じことであるが「心理学的事実を歴史的に感光させ」ることを求めていた。疎外を心理的（ないし精神的）事実と考える以上、その歴史・社会的背景が問われねばならないのは、右の立場からして

当然のことである。それは、いいかえれば、疎外の原因を明らかにすることなのである。

ところが、ミルズに依拠しつつ、個々にとらえられた疎外状況を普遍化し、その根底の原因を明らかにするという作業は、実はそれほど容易な作業ではないのである。われわれはこれまで、かなりはがゆい思いをしながらも、疎外の原因について、特殊二十世紀的状况、産業化の進展、理性なき合理主義、機械、組織等という断片的なできごとをしか指摘してこなかったのであるが、これはミルズ自身がそのような形でしか原因を論じていないという事実によって制約された結果、そうなっていたのである。その意味では、疎外の原因を明らかにしようとするこの節も、なぜミルズがこのように断片的に原因を示すことしかできないのかという問題として、提起しなすことを強制されているといえよう。

ミルズは、右に述べたような心理学を構想して、ガスと共著で『性格と社会構造』を出版している。これはミルズには数すくない原理論をあつかった書物である。そして、原理論であるが故に、そこには彼の方法論上の問題点が赤裸々に示されている。

彼らが本書で求めるのは、パースナリティを社会構造との関連で理解すること、いいかえれば生物学的・心理学的なパースナリティ論を社会構造論につなぐことである。『序論』において、彼らは、それをフロイトないしはG・H・ミードをマルクスないしはM・ウェーバーとつなぐことだとも表現している。というのは、前者は人間をその全行動においてとらえており、後者は社会をそれぞれの歴史的時代について全関連的にとらえているからである。両者の媒介として、彼らは、ミードの「一般化された他者」ないしはフロイトの「超自我」の概念が有効である⁽¹⁾と考える。こうして、性格構造についての彼らの全理論が容易に形成されることになる。すなわち、一方には生物学的に形成され

る「個人 (person)」がある。他方には社会構造が諸制度という形で「個人」の前にあらわれ「個人」に一定の役割をおしつける。個人はこの役割を遂行する中で社会が望むパースナリティを身につけるのである。それも「一般化された他者」や「超自我」を媒介として、自発的に身につけるのである。⁽²⁾ この理論によれば、例えば先に示したホワイ・トカラーの疎外は次のように理解されることになる。企業という制度が、あるいは「パースナリティ市場」という制度が、ホワイト・カラーに要求する役割のうちに疎外が含まれている。そして、ホワイト・カラーは、この役割を遂行しようとして、あるいは遂行する中で、すすんで疎外されたパースナリティをわがものとする、と。

このような役割取得を軸とする性格形成論は、社会学においてめずらしいものではない。それは、ミード以来多くの学者によって主張されてきたものである。「社会が人間をつくる」という側面のみを強調するなら、この理論は、パースナリティ形成過程の細部をかなり説得的に説明しており、その限りについて評価できるものである。しかし、それは役割そのものについては何の説明をも含まない。それ故、この理論は、それだけが切り離されて主張される場合には、本質的に保守的なものとならざるをえないのである。というのは、一般に制度が要求する役割とはその制度の維持に好都合な役割にすぎないからである。ある個人が役割取得に失敗したとき、それは「病理現象」としてのみ問題とされることになる。変革の可能性は、この理論の外にはみでざるをえないのである。したがって、ミルズたちが性格形成の理論としてミードからこの理論をかりたとき、すでにそこには、彼らの疎外論をたんに状況説明的なものにとどまらせる必然性が含まれていたのである。

もちろん、彼らは制度が要求する役割が常に肯定的なものだと考えてはいない。疎外を生み出すような役割が制度によって要求される場合があることを認めてはいる。その点で、彼らは保守「主義」者ではない。また、この理論に

よって変革をも説明しようとし、新しい役割の創造ないし要求を問題にもする。そうであればあるだけ、今度は、役割を規定する諸制度が、その全体的な配置を示す社会構造が、問題となるのである。ところが、マルクスとウエーバーに学んだはずの社会構造に関して、彼らは全然マルクスのではないのである。

彼らは、社会構造の構成要素として五つの秩序(orders)と四つの領域(domains)をあげる。それらは、政治的・軍事的・経済的・宗教的・親族的という秩序と、象徴・技術・地位・教育という領域とである。これらの組み合わせによって社会構造が決定されるのであるが、このうち秩序を形成する五つのものについては、それぞれが自律性をもった独立変数と考えられているのである。ミルズたちは、これらの秩序が相互に関連し合つて変動をひきおこす、その関連の型を設定する。しかし、そのいづれかに歴史の中の主動的な力を与えることを断固として拒否するのである。あらゆる変動を説明しようように、それは常に開かれていなければならない。

「われわれは、あるひとつの制度的秩序に基礎をおく、あるいはその秩序内で一般的なパースナリティに基礎をおく、何らかの普遍的な歴史理論を受け入れることはできない。いかなる歴史的時点においても、各制度的秩序の正確な範囲——および他のすべてに対するその関係——が確定されねばならない。それらの重みと関係は経験的に開かれた問題なのであり、われわれは、歴史的変化の支配的様式との関連でいかなる時代をも組み立てようとしなしかたで、それを常に開いておかねばならないのである。」⁽³⁾

マルクス主義は、経済的秩序に普遍的に第一義性を与えている。故にそれは閉じられた体系であり、否定されねばならないのである。

ここには、マルクス主義に敵対する多元論が、完成されたむきだしの姿で示されている。このような多元論の立場に立ちながら、しかもミルズが現代社会について多くの示唆に富む分析を残しえたのは注目すべきことである。それ

は、「粗野な」「形骸化した」マルクス主義者に対する実質的な批判を形成しているといえよう。しかし、一般的にいえば、このような多元論から導きだされるのがせいぜいのところ型の設定にすぎないのは当然のことである。それは、多元論に本質的な限界なのである。『性格と社会構造』では、原理論があつかわれているが故に、この限界が明瞭に示されている。要するにその全巻は、抽象化によってまったくの常識に堕してしまつたさまざまな型の不毛な羅列に終らざるをえなかつたのである。原理論ではない他の書物もまた、この限界をまぬがれていくわけではない。『ホワイト・カラー』はほぼ一貫して状況描写のみに終始している。『パワー・エリート』では大衆社会という「構造」が示されるが、この「構造」こそ現代社会についてミルズがつくりだした型であり、『性格と社会構造』との相違は、ただそれが非常に精緻なものであるという点にのみあるのである。その意味では、ミルズの師はマルクスではなく、一貫してウエーバーであつたといわねばならない。

多元論の立場から型の設定によつて「構造」を描くとき、諸要因は相互に平列的にのみ関連させられる傾向をもつ。ミルズの場合、疎外の原因として先に述べたようなさまざまな要因が指摘されはしても、それらは重層的な構造（ミルズの「構造」ではない）を形づくつてはこないのである。原因の指摘は断片的なものにとどまり、それらが寄せ集められたときには、特殊二十世紀的状况ないし大衆社会という型が浮かびあがってくるにすぎない。このように型の設定の中に疎外を位置づける結果、疎外の歴史的な把握は不可能になる。この点では、とりわけ、現代社会についての型が十九世紀との対比によつてつくられてゐる（本来、型とはこのようにしてつくられるのであろうが）この問題点が指摘されねばならない。『ホワイト・カラー』でたえず舞台まわしの役割をになわされるのは、西部魂をもつた十九世紀の独立自営農民である。『パワー・エリート』で大衆に対比されるのは公衆——そんなものは実体として

はどこにも存在しなかった——であり、大衆社会に対比されるのは自由競争を前提とした「均衡理論」の社会である。このように十九世紀との対比で現代社会が描かれる結果、十九世紀と二十世紀に一貫している資本主義という構造は、ミルズの観点から基本的には抜けておちてしまうことになる。現代社会が疎外をもたらししているとすれば、それと対比される十九世紀は疎外のないバラ色の時代となるのである。だから、「アダム・スミス・ジェフソン的な疎外されざる人間」ということばが、何のためらいもなく述べられるのである。⁽⁴⁾ たしかに、独立自営農民たちは、現代の労働者やホワイト・カラーと同じ形態の疎外におちいつてはいなかったろう。しかし、彼らを開拓に、そして競争にかりたてたのは、金の力であり、資本の、資本主義の力であった。資本（死んだ労働）による人間（生きた労働）の支配が疎外であるという原理的把握、この疎外が、それぞれの時代に、それぞれの階級や階層の上に、異った形態のものであらわれるという把握——このような把握はミルズには全然存在しないのである。

疎外が多元的な型の中に描き込まれる結果、ミルズにとって、状況全体は身動きのつかないものとなる。型はもともと静的なものである。それ故、この状況を動かす力は、状況の外にしか求められない。フロムが「農業に従う人、労働者、教師、種々のタイプのビジネスマン」等、要するに「いくらかましな人間」に愛の原点を求めたのと同様に、ミルズもまたインテリゲンチヤの理性に疎外からの解放の原点を求めるのである。というのは、彼はインテリゲンチヤに対して、状況の外にあって状況を客観的に眺める役割を期待しているからである。このように、彼らにとっては、疎外からの解放はいつも、外からしか、疎外されていない（であろうと彼らが考える）人間からしか、もたらされないものである。

(一) H. Gerth, C. W. Mills, "Character and Social Structure" (New York, Chicago, Burlingame: Harcourt,

Brace & World, Inc. 1964). "Preface."

(2) *ibid.* Part I, Chap. II.

(3) *ibid.* p. 402.

(4) 『社会学的想像力』、一二三ページ。

6

疎外からの解放に関して、ミルズはフロムのようにユートピアを描くことはしない。彼は変革の主体をさがし求める。

『第三次世界大戦の原因』の第一部には『人間は歴史を作るか』という魅惑的な題名がつけられているが、これはミルズの変革のプログラムを知る上で興味ある章である。ここで彼は、エンゲルスの「力の平行四辺形」という形の歴史把握を、中世や近代の初期には有効であったとしても現代にはあてはまらない理論であるとして否定する。現代は「権力手段が範囲においては巨大であり、また形体においては中央集権的な社会¹⁾」であり、そこではパワー・エリートの決定（ないしは決定をサボること）は、直接に歴史を動かしうるほどの力をもっているというのである。この主張は、『性格と社会構造』において五つの秩序をそれぞれに独立変数とした考え方や、『マルクス主義者たち』の中でくりかえし上部構造の相対的独自性を強調している考え方と、共通するものである。いずれにしろ、答えは「人間は歴史を作る、しかし限定された人間が」ということである。

ところが、現代社会で、パワー・エリートは必ずしもこの役割を果たしてはいない。彼らもまたともすれば歴史の潮流に流される傾向がある。

「われわれの時代においては、もし人間が歴史を作らないならば、人間はだんだんと歴史形成者の用具や歴史作りの単なる客体となる傾向がある。しかし、新しい権力手段を自由にできるはずなのに、しかもみずからの状況を運命の状況として定義する人たちは——この人たちはいま、客観的には怠慢をおかしているのではなからうか。」

彼らの怠慢については、すでに『ホワイト・カラー』や『パワー・エリート』を通じて明らかにしてきた。この怠慢は、彼らが理性を喪失して、たんに判断を下すだけの「人間機械」になりさがっていることにあつた。ミルズは、エリートのこの体質がアメリカ全体に制度化されて行きわたつてしまっていること、「合理性をうしなつた能率主義」が蔓延していることを鋭く告発する。

「残虐行為が犯されており、しかもだれもがそれらの行為に抗議をださず、ぶきみな、精神分裂症的症状でさえある仕方でもつて、それらの行為が人間の意識から切りはなされているという事実、これがきわだつて目だつのである。われわれの時代の残虐は、社会機構の「機能」としての人間によつて行なわれる、——これらは抽象的見解にとりつかれた人間であつて、この見解こそ、かれらの犠牲者である人びとを、またかれらじしんの人間性をも、かれらから隠してしまうのである。それらは非人間的行為である、なぜならば非個人的であるから。それらはサディスティックではなくて単にビジネスライクである。それらは攻撃的ではなくて単に能率的である。それらはぜんぜん感情的でなくて技術的に手際がよい。」

つまり、人間がすでに歴史を意識的に変革して行くだけの力を獲得していながら、その力が理性とは結びつかないで、たんに技術としてひとり歩きしている状態——それが現代なのである。それはまさに疎外状況であるが、同時にその疎外状況の深化それ自体が、人々を、ますます小状況閉塞の状態に、すなわち自己疎外の状態に追いやっているのである。だから、歴史を意識的につくりうるようになったそのときに、歴史作りの主体としてミルズが期待するところの公衆は彼の前から消失する。

「アメリカの自己満足した青年たち、疲れた老戦士たち、ひとりよがりな自由主義者たち、主権論的教養を身につけたいきい

声の貴婦人たち——この人たちはすべてまったく自由である。だれもかれらを閉じこめない。だれもかれらを閉じこめてはならない。ところが、かれらはわれとわが身を閉じこめている——きいきい声の怒った人たちはかれらじしんの地方的怒りの総計のなかに、ひとりよがりで自己満足した人たちはかれらじしんの想像力に欠けた野心のなかに、わが身を閉じこめている。⁽⁴⁾

制度化されたこの状況は、ホワイト・カラーや専門家をも「陽気なロボット・技術的白痴・気の狂ったリアリスト」にしてしまっているのである。⁽⁵⁾

だから、疎外からの解放の主体をパワー・エリートに、あるいは公衆に求めることは、ミルズにとって不可能である。

しかし、彼は絶望しているわけではない。この状況の中で、彼はなお理性を信頼し、知識人の役割に期待をいだきつつけるのである。『社会学的想像力』においては、彼は、個人的・日常的なできごとを公的生活につなげて理解させる理性（つまり社会学的想像力）の重要性を強調し、その再興を求めている。『第三次世界大戦の原因』の中では、「知識人共同体」に次のような任務が与えられるのである。

「決定する人びとは、決定と怠慢とによってなんらかの悲しむべき影響を受ける、あらゆるところに住む男女にたいして、責任を負わされるべきである。しかし、だれによって、責任を負わされるべきなのか。それこそ、政治権力の当面の問題である。今日の東でも西でも、ただちにくだすべき返答はこれだ——「知識人共同体によって。」知識人においてほかのだが、歴史のなかで歴史作りの決定が果たす役割を識別することができようか。ほかのだが、いまだでは運命そのものが政治的争点にされねばならぬことを理解しうる地位にあるだろうか。⁽⁶⁾」

ここに明らかなように、ミルズにおいて疎外からの解放の主体として期待されているのはインテリゲンチヤなのである。しかし、公衆不在のもとで、このような形で理性の伝統を引き受けることを期待されているインテリゲンチヤ

とはどのような存在なのか。それは、現代社会のアウトサイダーであり、異邦人ではないのか。事実、ミルズは、公衆不在のもとで知識人となるべき道として、観念を修正して「實際的政策」を求める道と、「理想を保持する、それゆえ時機を待ちながら、ユートピア的な仕方、本来のままの形で理想をもちこたえる」という非現実的・非實際的な道とをあげ、断固として第二の道を選ぶことを主張するのである。というのは、その道こそが「世界と人間の条件」とについて考えるにあつての唯一の適切な方法だからであり、「知識人として平和の条件のために真剣に努力するにあつての唯一の現実的な行き方だからである」⁽⁷⁾。

それ故、インテリゲンチヤは孤立をおそれてはならない。インテリゲンチヤはたしかにアウトサイダーであり、そのような意味で疎外された存在ではあるけれども、社会全体が疎外状況を示しているとすれば、インテリゲンチヤのこの疎外こそは彼が正常な人間であることの何よりのあかしなのである。

「われわれは単に標準の保持者であるばかりではない。われわれはまた標準の創造者でもある。そして、われわれはこういうことをさとらねばならない。すなわち、知識人は疎外を享受し、そして疎外に悩んでいるのであるが、急進的な見解やより高度の標準を定式化する能力は、知識人がこの疎外のおかげで手に入れることのできる利益なのである、ということ」を、そのような自由の行使は、同時にそのような「疎外」からくる大きな利益でもあり、また、疎外をもっともよく、そしてたくみに使用することでもある。われわれのあいだではないまや「疎外」は、しばしば、逃避のためのしめっぽい小さなスローガンとして用いられている。標準の喪失と抱負の変質を非難するときには——たしかに、非難すべきなのだ——われわれは同時に新しい標準を発表せねばならない」⁽⁸⁾。

十九世紀を理想とするミルズは、現代においてもなお「自己教育的・自己創造的な人間の形成、すなわち、自由な合理的な個人の形成」⁽⁹⁾を求めつつける。そのこと自体は結構なことである。疎外された人間に対立してかかる人間像を

求めることをわれわれもまた否定はしない。しかし、ミルズは、現代社会においていかにしてそれが可能かを明らかにしえず、ただ説教するにすぎない。それ故、ミルズの理想とするインテリゲンチヤは、現実には、世の悪習を逃れて隠遁した賢人の姿をとるか、さもなければ理性という槍をひっさげて現代の社会構造に突進する西部魂にみちたドン・キホーテの姿をとることしかできないのである。

- (1) ミルズ、村上訳『第三次世界大戦の原因』(みすず書店、一九五九年)、一九ページ。
- (2) 同書、一九―二〇ページ。
- (3) 同書、一〇五ページ。
- (4) 同書、一七四ページ。
- (5) 同書、二四七ページ。
- (6) 同書、二四四ページ。
- (7) 同書、一二三―一五ページ。
- (8) 同書、一九四―一五ページ。
- (9) 『社会学的想像力』、二四五ページ。

7

要約しよう。ミルズは、主として現代のアメリカ社会について、実証的な多くのデータを提供している。特に政治の領域についてのデータには注目すべきものがある。しかし、彼は、その方法の故に、自らは歴史性を強調しながら、これらのデータの静的な因果連関の図式しかつくりあげることができなかった。つまり、彼はこれらのデータからひとつの理念型をつくりあげたのであり、それがいわゆる大衆社会論なのである。理念型であるが故に、大衆社会はも

つばら十九世紀との対比によって特徴づけられることになる。その結果、疎外の原因は二十世紀の諸特質に結びつけられるだけで、資本主義との関連は問われないままに終るのである。社会全体が疎外されている中で、解放の主体は疎外をまぬがれていると考えられる何ものかに、つまり社会の外にある何ものかに求められる。ミルズの場合、インテリゲンチヤにこの役割が期待されるのであるが、現実には、インテリゲンチヤも疎外をまぬがれているわけではなし、また社会変革の実力をもつてもない。そこで、最終的には、説教だけが彼に残された仕事となるのである。要するに、ミルズは状況を描きだした。問題を提起した。しかし、それを構造的に把握することはできなかったのである。